北宿遺跡

1988

前橋市教育委員会

序

本遺跡が所在する群馬県前橋市は、北に赤城、西に榛名山を望み、利根川の清流が中心部を流れる「水と緑」をキャッチフレーズにした、山紫水明に富む風光名媚な都市であります。

このように、自然に恵まれた本市域には、今から約２万５千年前の旧石器時代から現在まで人々が営々と生き続けてきており、その文化遺産としての遺跡が数多く残されております。

長い歴史のなかでも、特に古墳時代においては、この地域の支配者は、東国の雄として知られ八幡山古墳をはじめとした８基の国史跡の古墳のほか、中小の古墳多数を今に伝えております。

また、奈良・平安時代に至ると、大国と称された上野国の国府が現在の元総社町に置かれ、この地は政治・経済・文化の中心地として発展してまいりました。

今後も開発に伴う発掘調査の進展により、さらに本地域の古代史が解明されていくものと確信しております。

このたび、前橋市役所土木部土木課より、前橋市教育委員会へ新設道路建設に伴う埋蔵文化財の取扱いについての問い合せがあり、確認調査を実施しましたところ、遺跡地であることがわかりました。遺跡の取扱いについて関係者と協議・調整を行ないました結果、前橋市教育委員会により緊急発掘調査を実施することになりました。

発掘調査の結果、奈良・平安時代のものと推定される住居跡二軒と井戸跡が検出されました。住居跡二軒と井戸跡のみの調査ではありましたが、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、この調査を実施するにあたり、物心両面にわたり援助していただきました土木部土木課の方々、また発掘作業に直接従事していただきました方々に対し厚くお礼申し上げます。

本報告書が、西大室町及び周辺地域の歴史を解明する一助となり、また斯学の発展に少しでも寄与できれば幸甚に存じます。

昭和６３年１１月１５日

前橋市教育委員会
教育長　岡本　信正

目　　次

序	頁
Ⅰ　調査に至る経緯	1
Ⅱ　遺跡の位置と環境	1
Ⅲ　調査の経過	4
Ⅳ　層序	4
Ⅴ　遺構と遺物	5
Ⅵ　まとめ	8

例　　言

1．　この報告書は、前橋市土木部土木課により建設される道路予定地における発掘調査に関するもののである。

2．　調査は、前橋市教育委員会管理部文化財保護室埋蔵文化財係が担当し、遠藤和夫・新保一美が参加した。

3．　本書の作成は、遠藤和夫・新保一美が共同討議のうえ、執筆・編集にあたった。

4．　本遺跡の略称は、６２Ｅ１３である。

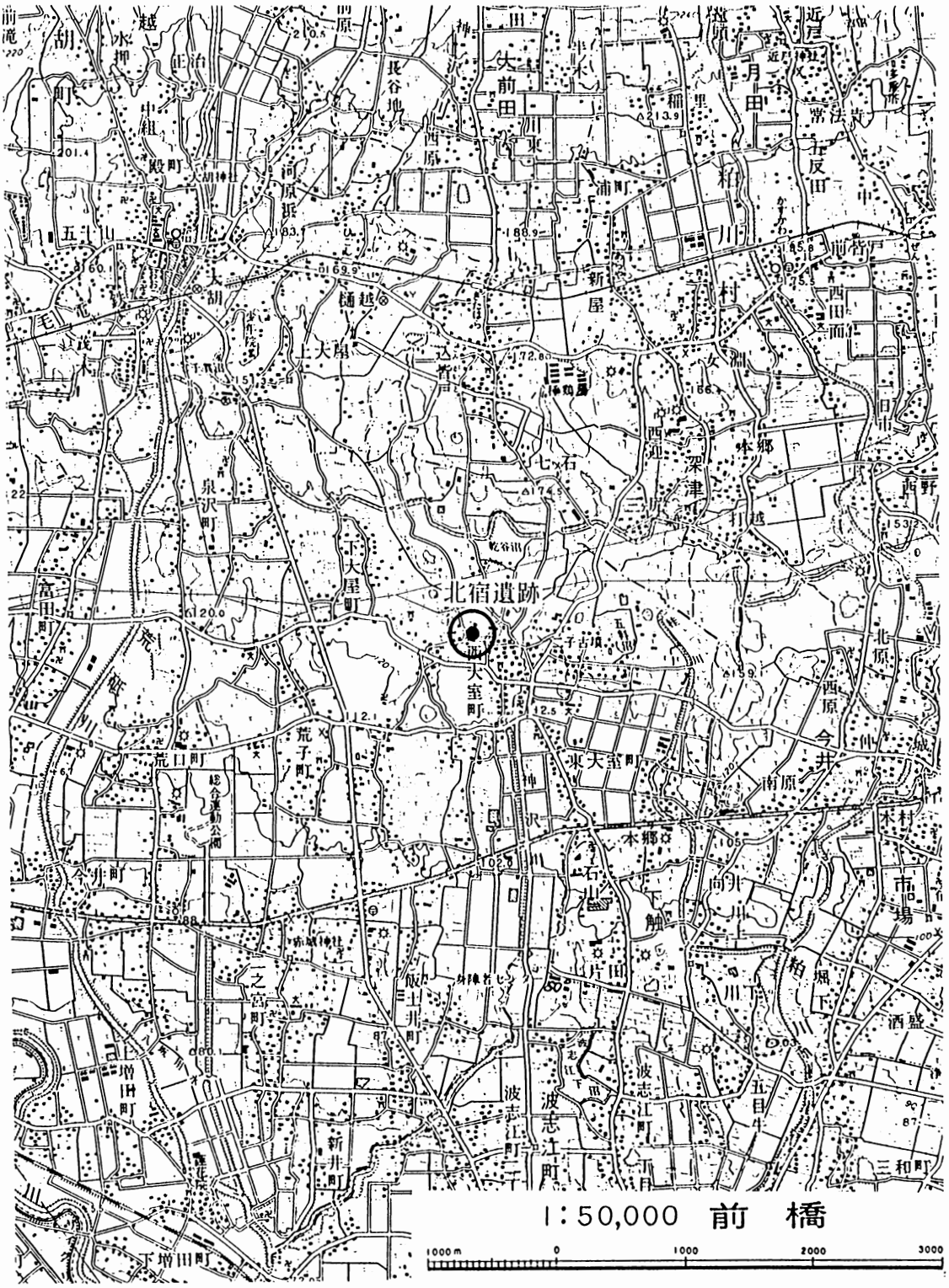
5．　遺構の略称は次のとおりである。

　Ｈ‥住居跡　Ｉ…井戸跡

6．　遺構・遺物実測図の縮尺は次のとおりである。

　遺構‥全体図１／１０００　　住居跡‥　１／４０

北宿遺跡の位置



I　調査に至る経緯

昭和６３年２月４日付で本調査地の荒砥地区５５６号線道路改良工事にかかわる埋蔵文化財表面調査依頼が、開発主者体である前橋市助役・藤島清多氏より前橋市教育委員会へ提出された。

２月５日に前橋市教育委員会管理部文化財保護室職員により表面調査を実施した結果、桑畑部分に土器の散布が見られ、遺跡が発見される確率が高い地域であることが推定された。表面調査の結果を踏まえて、直接の工事主体者である前橋市土木部土木課と試掘並びに発掘調査についての協議を行なった結果、道路工事施工前に試掘調査を実施し、住居跡等の遺構が確認された場合には、その部分を拡張して調査するということに至った。

２月２９日、道路新設工事部分延長７００ｍにわたる試掘調査が行なわれ、その結果道路延長部分のほぼ中央付近の桑畑下よりカマドを伴う住居跡２軒・井戸跡１基が確認された。

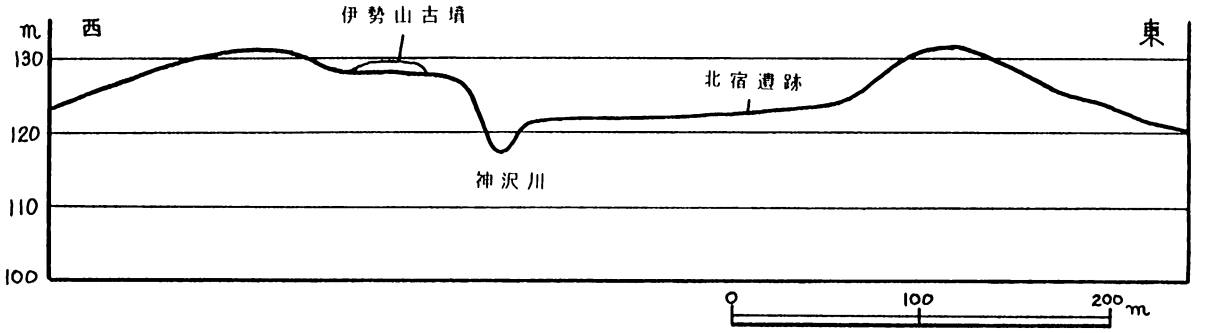
前橋市教育委員会と土木部で協議・調整を行なった結果、緊急を要する工事であり、かつ小規模遺跡であるということから前橋市教育委員会によるぬ発掘調査が実施されることになった。

尚、本遺跡の名称は、旧地籍の字名を採用し、北宿遺跡とした。

II　遺跡の位置と環境

１．遺跡の立地

北宿遺跡は、市街地から東へ約８ｋｍほど離れた赤城山南麓の群馬県前橋市西大室町字北宿１７４６に所在する。地形区分から見ると赤城火山斜面にあたり、小河川（神沢川）により開析された谷地と低台地の境目付近に位置している。遺跡の南約２５０ｍ付近を県道前橋一今井線が走っており、西約４００ｍの所には産泰神社、南東約３５０ｍの所には大室神社がある。遺跡の北と南は、現状谷地水田となっており、その水田にはさまれてやや高くなっている桑畑部分で住居跡他が確認された。遺跡地の標高は、約１２０ｍで東西の台地とは約１０ｍの比高差がある。



遺跡周辺の地形断面図

２．歴史的環境

本遺跡が立地する赤城火山斜面特に大室地区は、縄文時代・古墳時代・奈良時代・平安時代の遺跡が数多く調査されている地域である。

① 旧石器時代　三屋遺跡　北三木堂遺跡　牛伏遺跡　石山遺跡　柳久保遺跡　頭無遺跡

② 縄文時代
（草創期）北三木堂遺跡　北山遺跡　荒砥北原遺跡
（早　期）上縄引遺跡　柳久保遺跡　荒砥北原遺跡
（前　期）上縄引遺跡　下鶴谷遺跡　荒砥諏訪遺跡　鶴谷遺跡
荒砥富田遺跡　荒砥上ノ坊遺跡　洞山遺跡　今井南原遺跡
（中　期）上縄引遺跡　荒砥諏訪遺跡　洞山遺跡　二本松遺跡
二之堰遺跡
（後　期）上縄引遺跡　荒砥島原遺跡　荒砥上川久保遺跡

③ 弥生時代
（中　期）荒砥島原遺跡　頭無遺跡　荒口前原遺跡
（後　期）下縄引遺跡　北山遺跡　宮下遺跡　西原遺跡

④ 古墳時代

本遺跡周辺には、国史跡の前・中・後二子古墳の３基の前方後円墳を始めとして、上毛古墳総覧には大室分として大小１７８基が記載されており、古墳の密集地となっている。遺跡の北東約１００m付近には中島古墳群、北西約４００m付近には伊勢山古墳群、南西約７００m付近には阿久山古墳群が存在する。この地域の古墳の多くは、６世紀中頃から７世紀中頃にかけて造られたものと思われる。

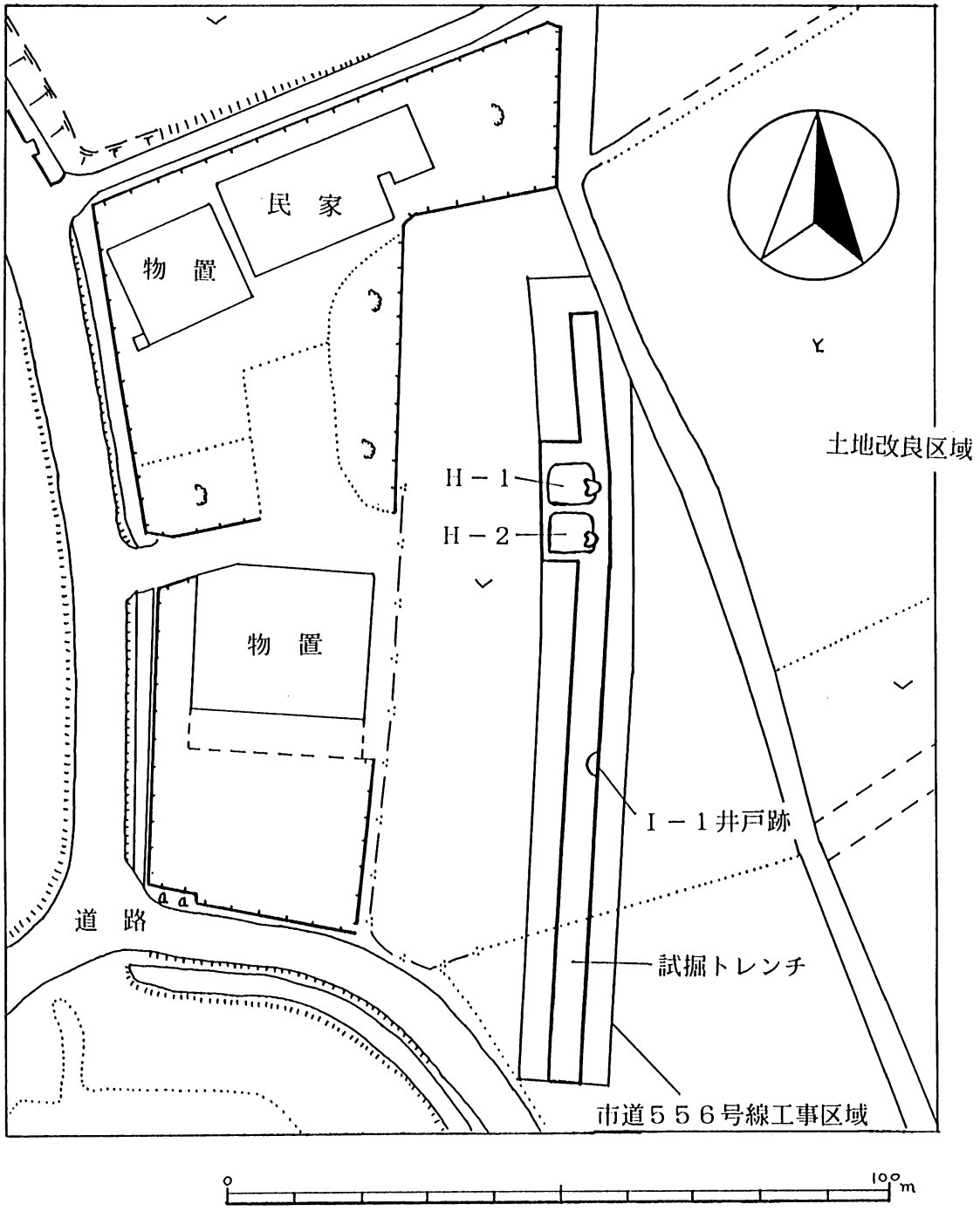
この時期の集落跡の調査としては、大室小学校校庭遺跡・大室小学校農場遺跡・大室石原遺跡等があげられる。　また、荒砥荒子遺跡・丸山遺跡・梅木遺跡では居館跡と見られる遺構が調査されている。

⑤奈良・平安時代

本遺跡を含め近隣の台地上に数多くの集落がつくられるようになり、同時に食料生産のための水田も谷地を中心に開かれるようになる。

⑥ 中　　世

大室城跡・大室元城跡・荒子の砦跡等の城郭跡が知られている。



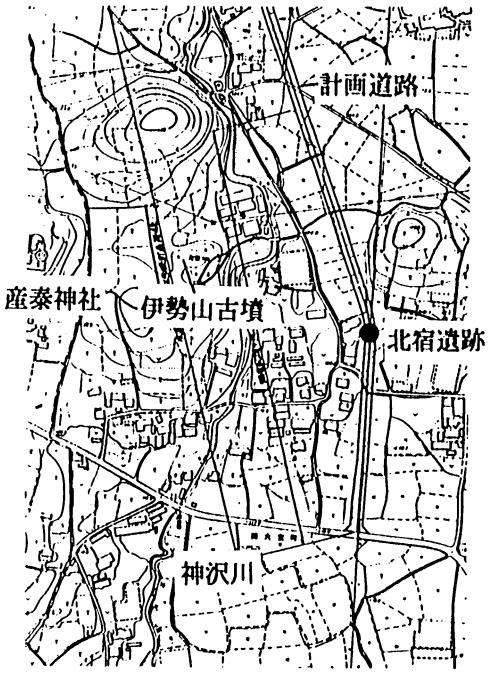
北宿遺跡全体図(1/1000)

III　調査の経過

発掘調査は、昭和６３年３月３日から９日までの延５日間にわたって行なわれた。

寒風の吹きすさむなかでの作業であったが作業員・関係者の協力により無事調査を終了することができた。

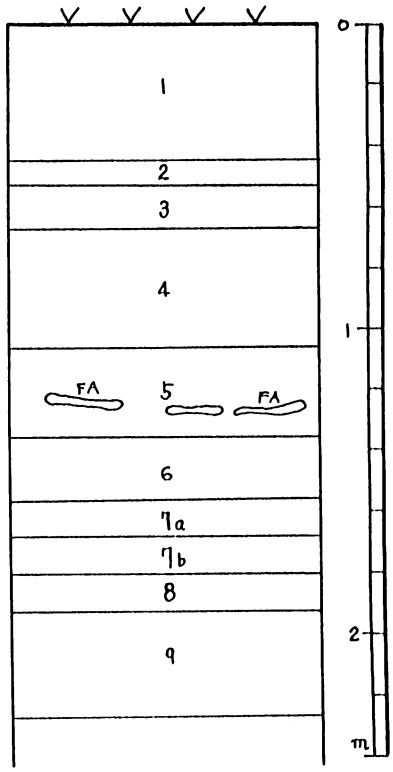
３月３日　メッシュ設定・レベル移動
　　発掘前現状写真撮影。
３月４日　住居跡・井戸掘の跡り下げ。
３月７日　住居跡・井戸の跡精査。
３月８日　カマド跡の調査。
３月９日　カマド精査・全体の精査
　　遺跡の全景写真撮影。



IV　層　　序

遺跡地周辺は、良好なロームの堆積が見られる地域であるが、本遺跡が所在する低台地に挟まれた谷地部分では５層以下が水で洗われた砂礫層となっており、かつては神沢川の旧流路であったことがうかがえる。

１　層　現在の耕作土。
２　層　Ｂ軽石を多量に含む層。
３　層　黒褐色土。FPを3%含む。
４　層　褐色土。FPを10% 含む。
５　層　黒褐色土。FPを10% 含む。
６　層　褐色砂層。
７ａ層　灰色礫層。
７ｂ層　灰色礫層。
８　層　褐色砂層。
９　層　灰色砂礫層。



Ⅴ　遺構と遺物

1．遺　構

（1）Ｈ－１住居跡

本住居跡は、耕作等により、既に削平・整地を受けているため残存状態は悪く、壁高は北壁で約１５ｃｍ・南壁で約５ｃｍ認められる程度であった。

住居の形状は、東西3.3 ｍ・南北4.1 ｍの隅丸長方形で、面積は約13.53 ㎡である。

周溝・柱穴・貯蔵穴については、いずれも検出されなかった。カマド前から住居中央部にかけて、直径１ｍ厚さ２ｃｍ程の範囲でロームが貼られていた。この貼床下には赤褐色の炭化物が約２ｃｍの厚さで敷かれている状態で検出された。しかし総合的に見て、この住居が焼失住居である証左は見出せなかった。また重複している可能性もなかった。カマドは、東壁を3:2 に分けた南寄りの位置の壁外に築かれており、前述のとおり住居跡と同じく、ほとんどが既に削平されており、底部のプランを残すのみであった。

住居跡の方位は、Ｎ－90°－Ｅ、FPを微量に含む暗褐色粗砂を埋土としていた。

遺　物

遺物は、すべて小破片であり、復元し実測に至るものは見当たらなかった。土師器８に対し須恵器２の割合で出土している。

（2）Ｈ－２住居跡

本住居跡は、Ｈ－１住居の南に隣接する形で確認された。Ｈ－１と同様に耕作等により削平されていたが、１号住居よりは残りが良く、残存壁高は約25ｃｍであった。

住居の形状は、東西2.94m・南北2.8 ｍで北側の壁が南側の壁よりも長い変形の隅丸長方形を呈していた。面積は、約8.2 ㎡であった。

周溝・柱穴・貯蔵穴・貼床は、検出されなかった。カマドは、東壁の南から１／３のところの壁外に築かれており、焚口幅40ｃｍ・燃焼部長55ｃｍを計り、袖石・支脚は検出されなかった。

住居跡の方位は、Ｎ－11°－Ｅ、FP を５～15％含んだ暗褐色細砂により、住居は埋められていた。

遺　物

本住居跡からの出土遺物は、１号住居と同じく大半が土師器・須恵器の小破片であった。写真図版に載っている高台付碗と見られる陶質の土器は、胎土から推して本住居には関係ないものと思われる。

H-1

H-1 ベルト 地断

1 層　暗褐色粗砂層　FPを微量含む

H-1 カマド

H-1 カマド 地断

1 層　明褐色粗砂層　砂質耕作土

2 層　明赤褐色細砂層　焼土

3 層　褐色粗砂層　砂層＋焼土ブロック

4 層　褐灰白粗砂層　灰＋砂層

5 層　黒褐色粗砂層　砂質土

6 層　褐色細砂層　焼土、FPを含む

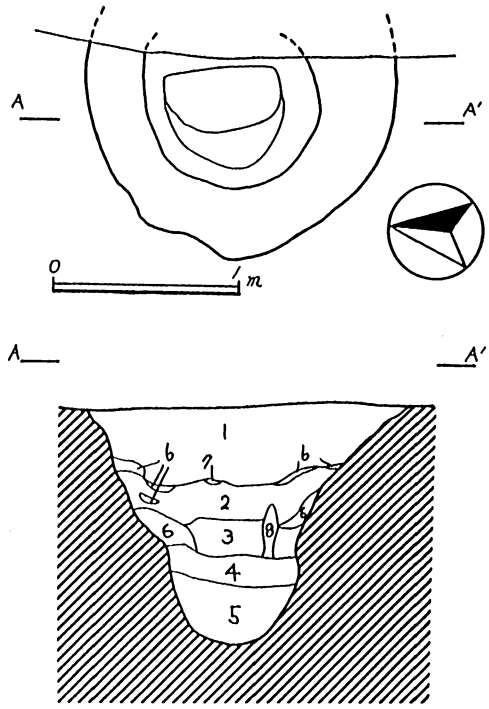
ソフトローム

H-1 カマド 地断

Ｉ－１井戸跡

（３）　井戸跡

Ｉ－１井戸跡は、Ｈ－２住居跡の南約30m付近で確認された。1/3 ほどが区域外にあるため完掘できなかったが確認面での径は165ｃｍ・中心部の深さは128 ｃｍで、平面形はほぼ円形になるものと思われる。断面形は開口部が広く底部が筒形になるロート状を呈している。



井戸跡　地断

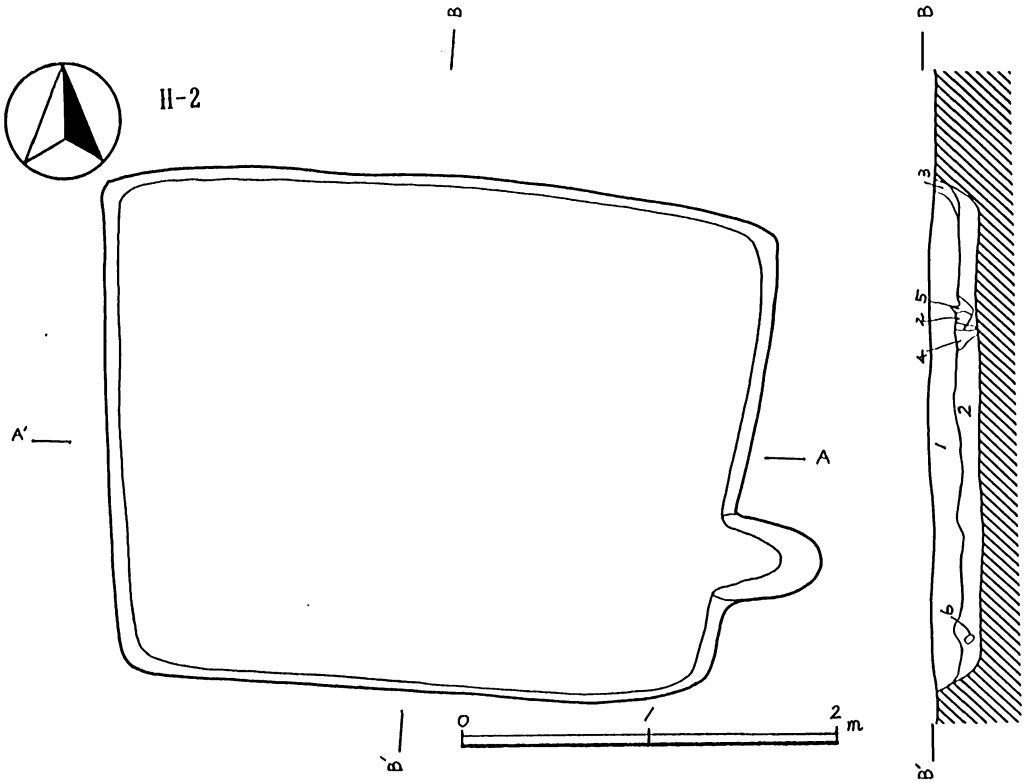
1 層	黒褐色粗砂層	FP7%含む
2 層	暗褐色粗砂層	FP・粘土ブロック含む砂質土
3 層	暗褐色微砂層	砂質土
4 層	にぶい黄褐色微砂層	3 層＋砂層
5 層	にぶい黄褐色微砂	砂質土＋4層
6 層	黄褐色微砂	ソフトローム＋砂
7 層	焼土ブロック	
8 層	黒褐色微砂	

Ⅵ　ま　と　め

市道５５６号線の新設に伴う事前の試掘調査の結果、工事区間のほぼ中央である微高地の畑部分で奈良平安時代の所産と思われる住居跡２軒と時期不明の井戸跡１基が発見され、調査されるに至った。住居跡は、いずれも以前に行なわれた小規模土地改良や耕作などで既にほとんど削平されており残存状況は悪く、床面までの深さは、１号住居跡で１０～１５ｃｍ、２号住居跡で２０～３０ｃｍ程であった。１号住居跡のプランは南北に長い均整のとれた長方形で、カマドは東壁の中央部よりやや南に作られていた。２号住居跡のプランは東西に長い不整な長方形で、カマドは１号と同じく東壁に付くが、南東部隅に近くなり、埼玉県荒川以南の住居例に類似している出土遺物はいずれも小破片であり、ほとんど同時期（真間期）のものと認められるが、２軒の住居跡の新旧を論じる資料としては不十分であった。

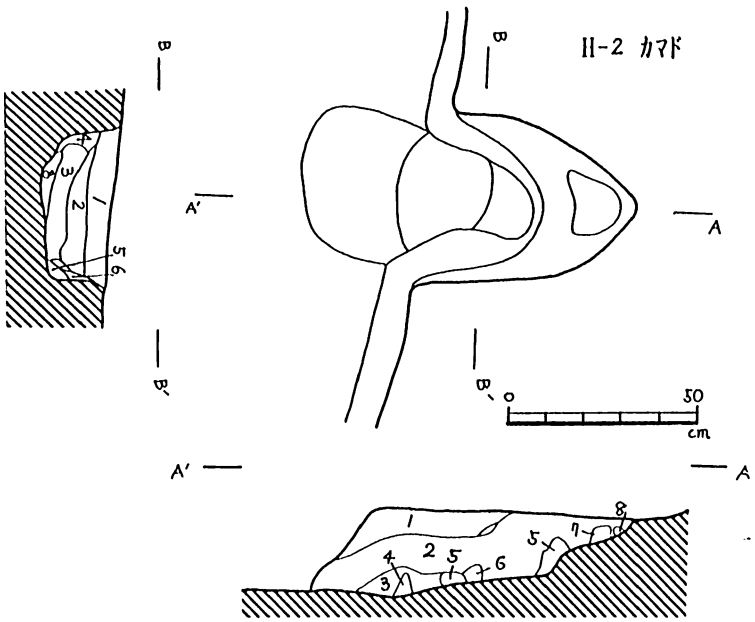
１号住居跡の貼床下の焼土敷については、灰かき穴にしては大きすぎ、前述のとおり焼失や重複の痕跡は見られなかったため、その使用目的が不明であったが、試掘トレンチによる地層断面から遺跡地周辺は、かつて高湿な地域であったと思われ、このことから類推すると住居内の湿気を取るために焼土や炭化物を敷いたのではないかと考えられるが、他の類例を見ないので憶測の域を出ないものである。

いずれにしても道路部分のみの調査であり、隣接地を含めた集落の全体がつかめない以上、情報量の少ない本遺跡の性格については、これ以上の詳細を述べることを避けたい。



H-2 ベルト 地断

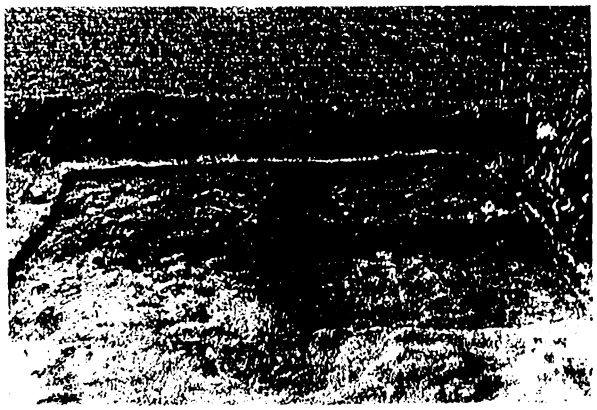
1 層　暗褐色細砂層　FP15%含む
2 層　暗褐色細砂層　FP5% 含む
3 層　褐色微砂層　ソフトローム 混入
4 層　暗褐色微砂層
5 層　黒褐色細砂層　FP15%含む
6 層　明黄褐色細砂　ソフトローム
7 層　暗褐色細砂　FP3%
8 層　黒褐色微砂



H-2 カマド 地断

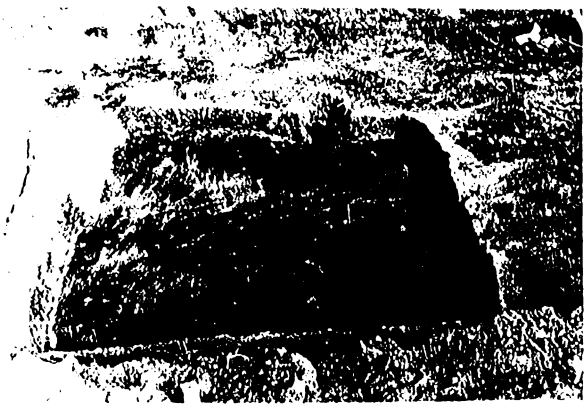
1 層　暗褐色細砂層　FP15% 含む
2 層　暗褐色細砂層　FP5%含む
3 層　焼土ブロック
4 層　黄褐色細砂　ソフトローム+ 砂
5 層　灰色微砂　灰 + 焼土ブロック
6 層　極暗褐色細砂
7 層　褐色細砂　灰+ ソフトローム+ 焼土
8 層　灰白色微砂　灰層

H-2 カマド 地断



H－1住居全景

H－1号住居カマド

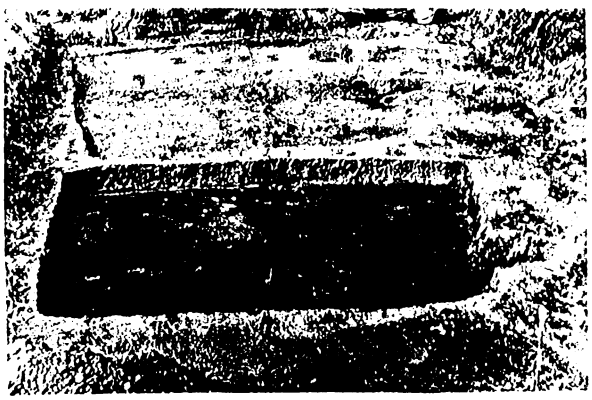


H－2号住居全景

H－2号住居カマド

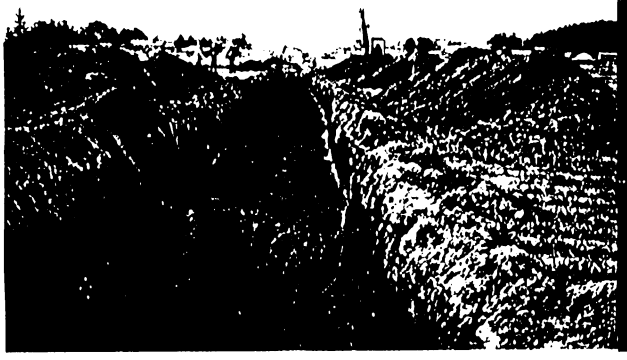
H－1号住居ベルト地断

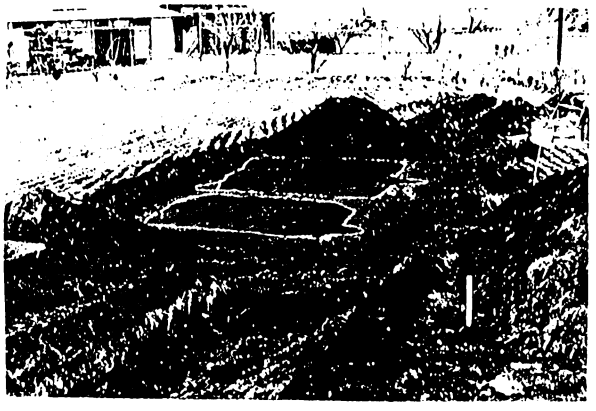
遺物出土状況

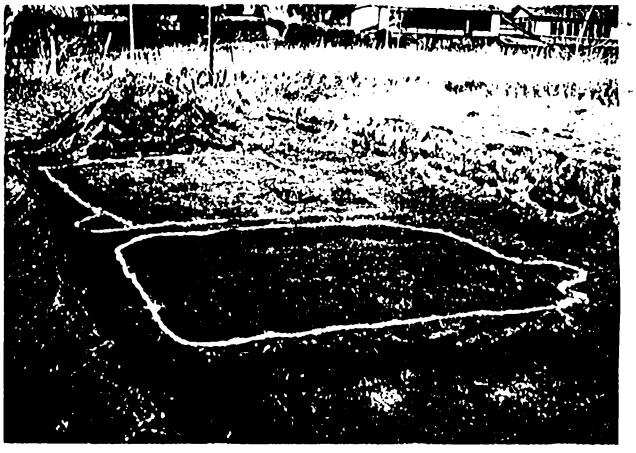


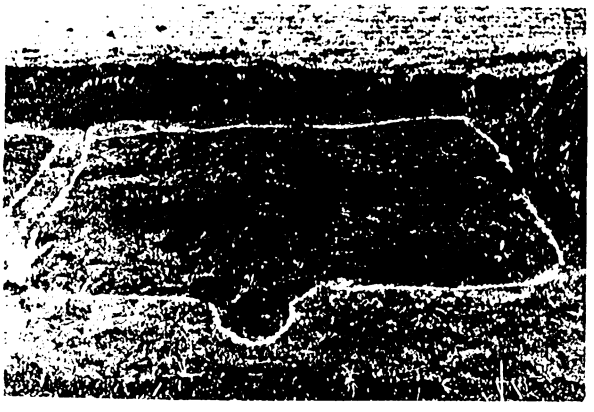
発掘調査地区全景

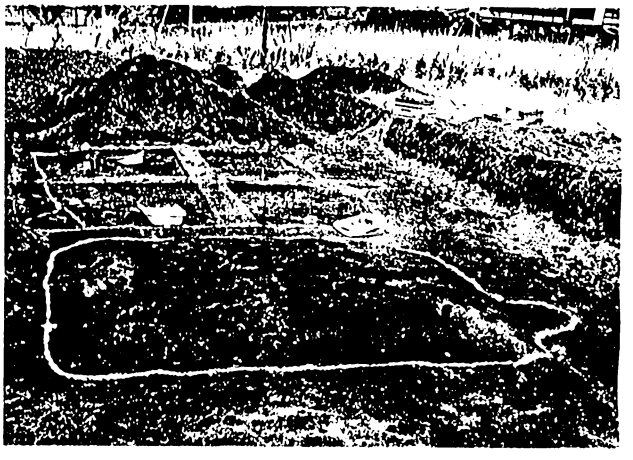
井戸跡

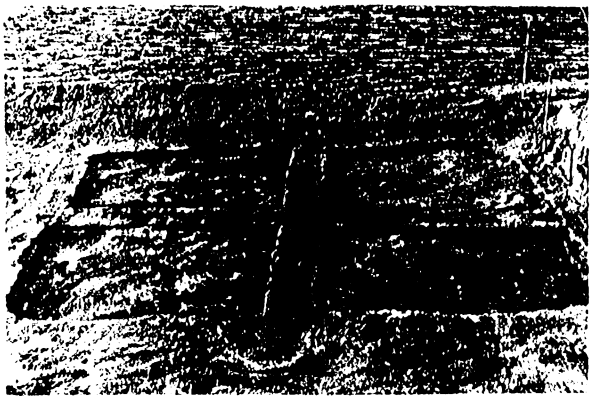




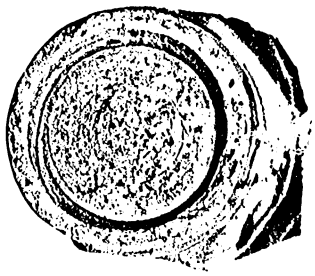






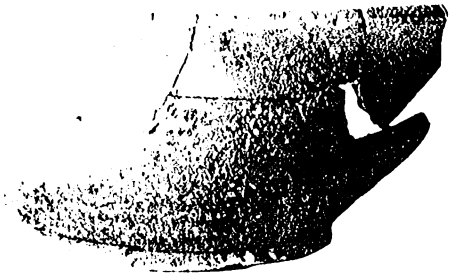


市道556号線 試掘調査	遺跡地部分の試掘
遺跡全景	H－1 H－2 号住居 プラン確認状況
H－1 号 住居プラン	発掘調査状況
H－1 住居ベルト	

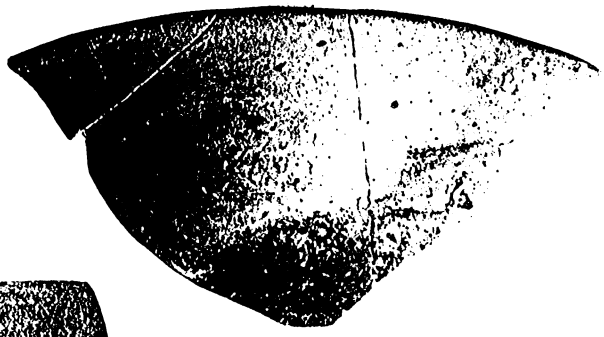


H－2　住居跡出土土器

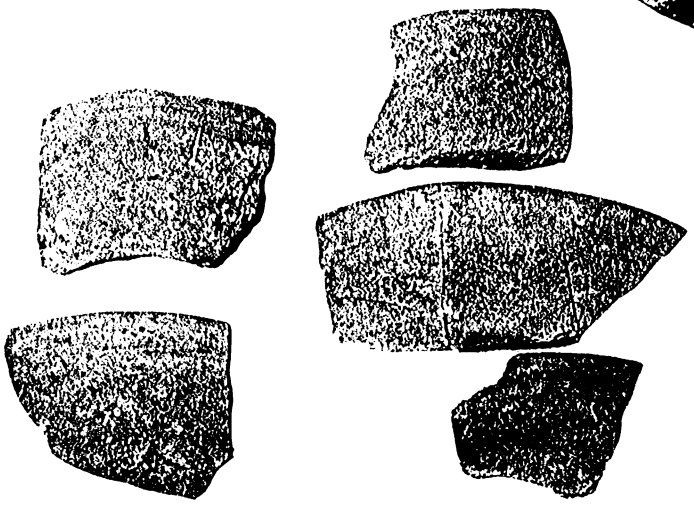
H－2　住居跡出土鉄製品



H－2　住居跡出土土師器わん



H－2　住居跡出土土師器わん



H－1　住居跡出土土師器　口縁

調　査　要　項

遺跡名称	北宿遺跡	
遺跡所在地	群馬県前橋市西大室町字北宿１７４６他	
遺跡記号	６２Ｅ１３	
調査期日	表面調査	昭和６３年　２月　５日
	試掘調査	昭和６３年　２月２９日
	発掘調査	昭和６３年　３月　３日～
		昭和６３年　３月　９日
調査面積	約　１２０㎡	
開発面積	約１３０７㎡	
調査原因	公共開発（道路改良工事）	
調査依頼者	前橋市長　藤嶋清多	
	（土木部土木課）	
調査主体者	群馬県前橋市教育委員会	
	教育長	岡本信正
事務局	管　理　部　長	関口和雄
	文化財保護室長	福田紀雄
	埋蔵文化財係長	浜田博一
調査担当者	遠藤和夫・新保一美	
調査参加者	糸井朱美・佐藤佳子・高橋ふみ枝	
	橋本登代美	
調査協力	前橋市土木部土木課・大幸建設株式会社	

北　宿　遺　跡（６２Ｅ１３）

印刷　昭和６３年12月１日

発行　昭和６３年12月15日

発行者　前橋市教育委員会　前橋市大手町２－１２－１

印刷所